
音響の如く鳴り響く剣

緋月雛菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音響の如く鳴り響く剣

【Nコード】

N3249Z

【作者名】

緋月雛菊

【あらすじ】

幻想郷から久々に日本へと遊びに来た妖の少女、華夜は日本がブリタニア帝国からの侵略を受けていた事を知り、ブリタニアの人間に実験体にされかけそうになったが一目散に逃げた。そして、彼女はアッシュフォード学園に逃げ込んだ

序章〈prologue〉

走る、走る。

瓦礫に覆われた道を、無心で走り抜ける。

そうしないと『彼奴等』から逃げ切る事は出来ない。

『隙間を操る力』は使わない。

あれは私に宿る『能力達の1つ』に過ぎない。

『ギアス』と言う呪われた力ではないもの。

私は『玩具』ではないし、かといって『人間』でもない。

どちらかと言えば『妖^{あやかし}』あるいは『不老不死となった者』と言った方が正しい。

けど私にとってはどうでもいい事。

今は『彼奴等』から逃げ切る事を専念するのが先。

私は故郷である『幻想郷』から、この『日本』へと徐々に遊びに来た。

だが『日本』は変わり果てていた。

『ブリタニア帝国』という大国によって『エリア11』という馬鹿

げた名前に変わり、国土は既にボロボロになっている。

此処で暮らしていた友達はブリタニア人に殺された。

：いや『ブリタニア人のせいで自殺した』と言った方が正しいのかもしれない。

おかしな実験の玩具になるより、はるかにマシだったのだろう。

けど私は自殺するきはないし、かと言って実験玩具になるきもない。

友達の肉体は私が消した。

魂は『白玉楼』に向かったと思う。

帰ったら幽々子と妖夢にお礼、言っとかなきゃね。

：気付いたら巨大な建物がある敷地内に入っていた。

建物自体が『紅魔館』よりはるかにデカいけど、敷地面積は『白玉楼』よりはかなり小さい。

とりあえず、此処で私は体を休める事にした。

だが、此処の人間に見つかったという事に気付いたのは目覚めた時だった。

主人公紹介

【オリ主】

華夜・アルヴィ

幻想郷出身で『ありとあらゆる能力を操る程度の能力』を持つ妖の少女。

美少年と見紛う程の顔付きで身長は平均女子の身長をはるかに上回っている。

因みにルルーシュより身長が高い。

髪は鮮やか銀色で、双眸は鮮血と見紛う程の鮮やかな紅色、肌は白い。

髪は長く、高く結わえている。

胸がつるぺたで身長が高いので、どうみても男の子にしか見えないが、本人は気にしていない。

自分の能力をギアスと同視された事が癪に触った為、以降ギアスを嫌っている。

C・Cと同じでピザ好き。

相棒の『妖刀・華霊月』を装備している。

【華夜の能力『ありとあらゆる能力を操る程度の能力』について】

フランドールの『ありとあらゆる物を破壊する程度』レミリアの『運命を操る程度』霊夢の『空を飛ぶ程度』パチュリーの『火水木金

土日月を操る程度』咲夜の『時間を操る程度』紫の『境界を操る程度』などの能力を扱える。

そのため、妹紅の『老いることも死ぬこともない程度』の能力も持っているため、彼女と同じ髪色と瞳の色をしている。

華夜自身、強すぎる力を持つ為、彼女にとってはちょうどよいコントロールしやすい能力になっている。

prelude

「……ここ……は……？」

少女、華夜が目覚めたのは見知らぬ部屋だった。

(……おかしい……私は昨日、外で眠っていた筈……何故部屋で眠っているんだ……?)

華夜はそう思いながら近くに置いてあった花が入っていない花瓶を『ありとあらゆる物を破壊する程度の能力』で花瓶の目を出現させ、目を破壊する。

途端、花瓶は音もなく粉々に破壊され、水が床に滴り落ちた。

(力は失ってははいないな……。さて、どうする?)

その時、部屋の扉が開かれる。

思わず構えると、入ってきたのは金髪の少女と黒髪の少年だった。

「あ、起きたんだ。よかった」

「……………」

華夜はじつと2人を見据える。

そして、2人が悪人ではないと知ると唇を動かす。

「貴方達が私を此処に？」

見た目とは違う高いソプラノの声に少女と少年は驚いた表情になる。どうやら2人は華夜の事を男の子と勘違いしていたようだった。

華夜は小さく溜息をつきたくなった。

「……私は華夜・アルヴィ。こう見えてもれっきとした『女の子』だ」
名を名乗ると啞然としていた少女はすぐ笑顔になった。

「私はミレイ・アツシュフォード。このアツシュフォード学園の生徒会長よ」

「俺はルルーシュ・ランペルージだ」

その時、華夜はルルーシュが偽りの名を名乗っている事を知った。

『白黒はつきりさせる程度の能力』と『真実と過去を知る程度の能力』を働かせていたからだ。

(彼と彼の妹はブリタニアの王家の血筋なのか……。見放されたのか、父親に)

「私は此処の外で寝ていたのか」

「ええ。ところで華夜は何処から来たの？」

ミレイの質問に華夜は口を噤んだ。

実際、幻想郷から来た妖だと言えば彼女達は混乱するだろう。

そこで、華夜は「遠い所から来た流浪人だ」とだけ答えた。

服は袴と羽織、中はさらしを巻いただけという服装と、刀を入れた鞘袋も持っているのを思い出した結果、そう答えた。

ミレイは簡単に納得したが、ルルーシュは納得出来ないと言った表情だった。

「遠い所とは？」

「詳細は答えられない」

質問を斬ると華夜はベットから降り、近くにかかっていた赤色の羽織をさらしだけ巻いた上半身につけ、妖刀・華霊月が入っている鞘袋を肩にかけた。

「ちよつ！どこ行くの？」

その言葉に華夜はチラツとミレイの方を振り返る。

「新しい宿。これ以上、貴方達に迷惑はかけたくないから」

「だったら此処に住みなさいよ」

「は？」

思いも寄らなかつた言葉に華夜とルルーシュは啞然とした。

「既にお祖父様から仮入学の形だけど許可を貰ったから大丈夫！此処は外より比較的安全だから。それに、貴方は誰かに追われているのでしょうか？」

虚を突かれた華夜は言葉を失った。

華夜は此処に来た途端、ブリタニア軍の人間に追われた。

力を使ったところを運悪く見られたからだ。

「…確かに、追われている。けど、私を匿ったら危険な目にあうよ」

「それは大丈夫よ！女の勘だけ」

否定するミレイに、華夜は呆れた。

「…頭が痛くなってきた」

「何時も俺達に回ってくるんだ」

「…苦労してんだな、ルルーシュ」

苦笑しながらも、華夜は先程能力で割った花瓶が置かれていたベツトサイドテーブルの脇に鞆袋を置く。

「…世話になる」

その言葉にミレイは表情を明るくした。

「決まりね それじゃ、行くわよルルーシュ。シャーリー達に知らせる知らせる！」

「押さなくても歩けます」

ミレイはルルーシュ強制連行する。

その様子を見、華夜は溜息をつきながら窓の外を見る。

満月が浮かび上がり、ぼんやりとした輪郭の学園に華夜は夢現の状態になりかけた。

「…暫くは帰れそうにないな…」

そう呟くと床についた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3249z/>

音響の如く鳴り響く剣

2011年12月11日13時45分発行